

## 古文 読解問題 「方丈記」 ～ゆく川の流れ～①

ゆく<sup>①</sup>河の流れは<sup>(a)</sup>絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。<sup>②</sup>世中にある人とすみかと、又かくのごとし。

たましきの都のうちに、棟を並べ、豊を争へる、高き、卑しき、人の住まひは、世々を経て<sup>(b)</sup>尽きせぬ物なれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家はまれなり。あるいは去年焼けて今年作れり。あるいは大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。所もかはらず、人も<sup>(c)</sup>多かれど、いにしへ見し人は、二、三十人が中に、わづかにひとりふたりなり。朝に死に、夕に生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。

知らず、<sup>③</sup>生れ死ぬる人、いづかたより来たりて、いづかたへか去る。また知らず、仮の宿り、たがためにか心を悩まし、何によりてか目を<sup>(d)</sup>喜ばしむる。その主とすみかと、無常を<sup>(e)</sup>争ふさま、いはば朝顔の露に異ならず。あるいは露落ちて花残れり。残るといへども、朝日に枯れぬ。あるいは花しぼみて露なほ消えず。消えずといへども、夕を待つ事なし。

問一. 「方丈記」に関する次の問題に答えなさい。

(1) 次の「方丈記」について説明した文の(ア)～(エ)に入る言葉を答えなさい。

「方丈記」は(ア)時代に(イ)によって書かれた(ウ)文学である。仏教の世の中の全てものは絶えず変化し続けているという(エ)を表しているとされています。

(2) 「方丈記」は三大随筆の一つとされている。他二つの作品名と作者を答えなさい。

問二. 傍線部(a)～(e)の動詞、形容詞、形容動詞の活用の種類と活用形を答えなさい。

問三. 傍線部①「河の流れ」が表していることとして最も適切なものを次の選択肢から選びなさい。

ア. 自然の美しさ      イ. 川の力強さ      ウ. 永遠に変化しないもの      エ. 絶え間ない変化

問四. 傍線部②「世中にある人とすみかと、又かくのごとし」について次の問いに答えなさい。

(1) どのような点で同じであると述べているのか十五文字以内で書き抜きなさい。

(2) 「人」と「すみか」をたとえた言葉をそれぞれ文中から2つ答えなさい。

問五. 傍線部③「生れ死ぬる人、いづかたより来たりて、いづかたへか去る。」を現代語訳しなさい。

## 読解問題 「方丈記」 ～ゆく川の流れ～ ① 解答・解説

問一、(1) ア 鎌倉(中期) イ 鴨長明 ウ 随筆 エ 無常観

(2) 枕草子(清少納言)・徒然草(兼好法師)

問二、(a) ヤ行下二段活用 未然形

∴「絶え」の言い切りの形は「絶ゆ」になるためヤ行。下に「ず」がついているため「未然形」と判断する。

(b) サ行変格活用未然形

∴「尽きす」は「する」の複合動詞。

(c) 形容詞 ク活用 已然形

∴活用から已然形と判断するか、「ど」が下についていることから「已然形」と判断する。

(d) ハ行四段活用 未然形

(e) ハ行四段活用 連体形

∴「さま」は体言になるため、「連体形」と判断できる。

問三、

問四、(1) 久しくとどまりたるためしなし

∴「かく」が指示語になるため直前から探す。

(2) 「人」↓ 川の水・朝顔の露

「すみか」↓ 水の泡(うたかた)・朝顔

∴「人」は一生や存在は儚く、次々と生まれ死んでいくものである。昔から住んでいた人々もほとんどいなくなり、新しい人々が住むようになる。「すみか」はそこに長くあるように見えるが、次々と建てられ、壊されていく。と書かれているためそれぞれ対応するものを文中から探す。

問五、 生まれ死んでゆく人は、どこからやってきて、どこに去っていくか